

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 霊長類名分類群における上肢の筋の形態学的特徴について(III 共同利用研究 2.研究成果)                                     |
| Author(s)   | 本間, 敏彦  |
| Citation    | 霊長類研究所年報 (1976), 6: 50-50   |
| Issue Date  | 1976-11-25  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/162679">http://hdl.handle.net/2433/162679</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

の基準とした。訓練ブロックの終了後、20課題からなる2試行課題を6シリーズ、さらにその後、20個の弁別LS訓練課題を与えた。

先の実験におけるSRT群のデータ<sup>1)</sup>を対照資料として加えた。各逆転開始直後の連続エラー数を3群間で比較した。SRT>P>Nで有意差があり、PおよびN試行が逆転訓練におけるエラーを低減させる作用があること、さらにその作用はN試行においてより顕著であることが判明した。2試行課題それにLS課題における正反応数を3群間に比較した。いずれの分析においても、P<SRT=Nで有意差があり、P試行情報はSRTの訓練効果を阻害すること、そして、N試行情報が方略学習の成立に必要な条件であることを示唆する結果が得られた。

- 1) *Japanese Psychological Research*, 1974, vol. 16, 149-156.

### 霊長類名分類群における上肢の筋の形態学的特徴について<sup>1)</sup>

本間 敏彦 (順天堂・医)

霊長類名分類群の上肢の筋がそれぞれの分類群の間にどのような形態学的特徴を持つかをしらべるためにチンパンジー、シャーマンそれぞれ1体1側の上肢の筋を剖見し、ヒトとマカク属のそれと比較した。

A) チンパンジー、シャーマン共にマカク属よりヒトに類似する点として、

①肩甲挙筋が第1～4頸椎横突起より起り、肋骨のみより起る前鋸筋とは大きく分離している。②菱形筋の頭部は欠除する。③深指屈筋は尺骨神経の枝をうける。④短母指伸筋は長母指外転筋より分離の傾向がある。

B) チンパンジー、シャーマン共にヒトよりマカク属に類似する点として、

① M. omocervicalis が存在するが附着は鎖骨遠位部にある。マカク属は肩峰附近に着く。② M. dorso-epitrochlearis が存在する。③ M. epitrochleo-anconeus が存在する。④前腕部で正中神経の枝が尺骨動脈にそって走り尺骨神経に交通する。

C) チンパンジーとシャーマンの間にみられた異なる点として、

①上腕二頭筋はチンパンジーでは長短両頭存在する。シャーマンでは鳥口突起よりの短頭が欠除し、長頭は肩甲骨関節上結節と上腕骨小結節下端よりの2部より起り、また上腕骨内側遠位<sup>1/2</sup>より起る部分もありこれらは筋腹

で一緒になる。附着部で上腕二頭筋腱膜の部分が非常に発達し筋性になっている。② M. epitrochleo-anconeus はチンパンジーでは尺骨神経がその深屈を、シャーマンではその表屈を走る。③長母指屈筋はシャーマンではかなり独立した筋として存在するがチンパンジーでは深指屈筋よりの弱い腱が母指へ行く。

以上今回得られた主な所見であるがひきつづき観察をかさね、特に神経支配との関係で検討する必要があると思われる。

### 縄文遺跡に含まれるニホンザルについての研究

Q

田中 正昭 (大阪市大・医)

縄文時代の遺跡から多くのニホンザルの遺体が出土しているにもかかわらず、それらについての詳しい報告はまだ行われていない。本研究の目的は、縄文遺跡出土のニホンザル化石から、当時のニホンザルの分布域および形態的特徴を明らかにし、また当時の人々が狩猟対象として、ニホンザルをどのように取り扱っていたかを分析することにある。

昭和50年における具体的研究としては、次のような形で、関係資料の実際の検索に着手した。1) 研究者によって保存されている遺跡獣骨の整理を通じて(観音堂、名越、猿穴、取浜、福田の各貝塚)。2) 発掘進行中の遺跡において(帝釈峠、小浜の両遺跡)。

〔岩本光雄記：田中正昭氏は、具体的成果についての記録を作成される前に他界された。関連して検索された獣骨についての知見の一部は、直接接触された遺跡研究者によって生かされうる予定である。〕

### Horseradish peroxidase の逆行性軸索輸送によるニホンザル視覚領皮質交連線維起始細胞の同定

正村 和彦 (岐阜大・医)

#### (1) 研究の目的

サル視覚領皮質の脳梁結合皮質 (area 18 の area 17 との境界皮質: OBr, Economo, OBg, Bonin) に horseradish peroxidase を注入し、軸索より取り込まれ、反対側半球にある細胞体に達した酵素を発色させる事により交連線維の起始細胞の層状分布, neuron type, neuron size の検索を行なう。

#### (2) 研究計画

1. ニホンザルの一側半球の area 17/18 の境界皮質 (この皮質部位は交連又は脳梁結合を有する事が知られている。)に horseradish peroxidase を注入する。注入後1～3日で脳を還流固定(固定液は 0.1 M 磷酸

1) 本研究の結果の一部は、生物科学第28巻第1号『コモンツパイ (*Tupaia glis*) の上肢の筋について——食虫類、原猿類との比較研究——』の中で報告された。